

ミハエルだ。

「おはよう、リヒャルド。勿論介意わないよ」

ミハエルが僕を見つめる眸にはラインハルトのように熱っぽいものはない。清潔な眼差し。

僕はそれを好ましく思うけれど、熱を孕まないことを酷く残念に思う。

「ピアノを弾きに行くのてしよう？」

僕は訊いた。

ミハエルはピアノの名手だ。それで学校から音楽室のピアノを使う許しをもらっている。

僕は毎日、音楽室について行き、ピアノの下に潜り込む。

リヒャルドたる僕が、ミハエルに見せる態度は、他の生徒にとってはちよっと承服しかねるものがあるだろう。

何と云っても、僕はへみんなのリヒャルドなだけだから。

でも、それをみんなが黙認するのは、ミハエルの人徳だ。

ミハエルは学級委員をしている。学級一の秀才で酷く穏やかだ。

だけど、そればかりぢやない。ミハエルの眸には熱がないのが誰の眸にも顕かだからだ。

へみんなのリヒャルドに欲望を抱かない、稀有な生徒。

僕は、だから、ミハエルが好きなのだけど、同時にそこが少し気に入らない。

それでも、ミハエルの清潔さは、僕にとつては別格。尊ぶべきもの。

何時だつてみんなを挑発し誘惑する僕だけど、僕を決してそう云う目で見ないミハエルを好ましく思う。

ミハエルはへみんなのリヒャルドではなく、僕の、リヒャルドのそのまを見ても呉れる。

まっすで清潔なミハエルの眼差しは僕を救って呉れる。

昼食を終えると、僕はミハエルについて音楽室に行く。

一日のうちでもっとも満たされる刻。

ミハエルはピアノを弾く。

僕はピアノの下に潜り込んで、寝る。

頭上からピアノの音が降ってくる。

さらさらと。

ミハエルとはじめて出逢ったときのことを思い起こしていた。

はじめて出逢ったのは校舎の塔の屋上でだった。  
僕は合格発表のときに見つけた秘密の出入り口から屋上に出ていた。入学式が終わって、めいめい、寮の部屋に荷物を置いた後だ。

誰が殺したクック・ロビン  
それはわたしとすずめが云った  
わたしの弓矢でわたしが殺した

誰が死ぬのを看取ったの  
それはわたしとはえが答えた  
小さな眸でわたしが看取った

誰がその血を受けたのか  
それはわたしとさかなが云った  
小さなお皿でわたしが受けた

誰が帷子作るのか  
わたしとカブト虫が云う  
針と糸とでわたしが帷子縫いましょう

誰がお墓を掘るのでしよう  
それはわたしとふくろうが云う  
ピツケルシヤベルわたしが掘ろう

誰が牧師をつとめるの  
わたしとミヤマガラスが云った  
小さな聖書を持っているわたしが牧師になりましょう

誰が付き人つとめるの  
それはわたしとひばりが云った  
暗くさえないのならわたしが付き人になりましょう

誰が松明掲げるの  
わたしとムネアカヒワが云う  
すぐに用意しわたしが持とう

誰が喪主になるのです  
それはわたしとはとが答えた  
愛をもつて悲嘆に暮れてわたしが喪主になりましょう

誰が棺を運ぶのか

それはわたしととびが答える

夜通し運ぶのでなければわたしが運ぶ

誰が棺覆いを持つのか

僕らとミソサザイが云う

オンドリメンドリ力を合わせ僕らが持とう

誰が讚美歌歌うのか

それはわたしとつぐみが云った

茂みに腰かけわたしが歌う

誰が鐘を鳴らすのか

それはわたしと牛が云う

何故ならわたしは力持ちわたしは鳴らす

空ゆく鳥たち吐息つきすすり泣いてる

鐘鳴るとき哀れなるクック・ロビンのため

拍手されて、吃驚して振り返ると、入学式で総代を務めていた少年だった。たしか、ミハエル。

「善い声だ。歌はやらないの？」

「やらない」

「そうか。残念だな。俺はピアノを弾くんだった」

「ピアノを？」

「うん。両親は医師になつてほしいみたいだけど、俺は音楽をやつて行きたいと思つてる」

「へえ。もうやりたいことが決まってるなんて、凄いな。尊敬する。それに、聴いてみたいな」

「寮の部屋にピアノが置けたらいいのに」

「ピアノなら、音楽室にあると思うよ？ 使わせて貰つたら？」

「無理だよ。怒られるに、決まっている」

「だから、さ」

僕は蠱惑的に微笑んだ。

「正式に許可を取るのさ。生徒の才能を伸ばすのは学校側の責務さ」

「ミハエルは端正な貌に清潔な微笑みを浮かべた。

「なるほど、やってみよう。俺はミハエル」

手を差し出しながら、云う。

「知ってる。総代だもの。僕はリヒャルド」

「ミハエルの手を握りながら、僕は云った。

「知ってる。有名なもの」

僕の口調を真似するみたいにして、ミハエルが云う。

「有名って？」

「は、僕らは、貌を見合わせ合った。それから、同時に嘖き出してしまおう。」

「ひとしきり、笑った後で、僕は訊く。『とんでもなく綺麗な子がいるって。みんなが君のことで大騒ぎしてる。女の子よりもずっと綺麗な』と云って。俺もそう思うよ」

「ミハエルは清潔に微笑む。そこに、誰もが孕む熱っぽさのようなものが、1ミクロンも含まれないことを、僕は感じた。そして、この場合、それは酷く好ましいものだった。」

「それはありがとう」

僕は云い、はじめてに近いほどに微笑んだ。

「何がはじめてかと云うと、他人の視線を意識しないで、微笑みを浮かべることが、だ。僕は何時だったって、誰かの視線を意識して、その眸に盪惑的に映るように意識しながら、微笑んできた。」

「ただ、ミハエルの眼差しは清潔で、僕にそれを求めなかった。」

「思えば、これはじめてに近いほどに微笑んだタイミングだったと思う。」

「僕が恋に落ちたとすれば。」

「僕の気持ちにミハエルに向かっていると云うのなら。」

「でも、残念だな」

「言葉とは裏腹に、恋を知った僕は、うっとりとした。」

「残念？」

「ミハエルが訊いた。」

「うん、少しね、残念。此処は、僕だけの秘密の場所だと思っていたのに」

「二つと、ミハエルは可笑しそうな笑い声を立てた。」

「はは、リヒャルドが此処を見つけたのって何時？」

「え、合格発表のときだけ？」

「不審に思って、訝しげに云うと、ミハエルが破顔一笑した。」

「鮮やかに、見惚れてしまった。」

「ぢゃ、俺の勝ちだな。俺は入試のときには見つけていたから」

「入試のときに学内を散策するなんて余裕だね。さすがは総代。でも、勝ち負けはなしだよ」

「二つと、ミハエルが笑った。」

「ぢゃあ、此処はふたりのものだと云うことにしよう」

「ありがとう。誰にも教えてはだめだよ」

「僕はミハエルの気が変わらないうちにと、急いで云った。」

「ああ。ふたりだけの秘密だ」

「ミハエルはきつと何気なく云ったのだらうけど、僕はそこに甘やかさを感じた。」

「うん。ふたりだけの秘密」

「うっとりとした。僕は云った。」

「数日後のことだった。」

「帰り支度をしていると、ミハエルが近づいてきた。」

「リヒャルド、学校側の許可が下りたんだ。音楽室を使って善いって」

「ピアノ？」

「うん、リヒャルドのおかげさ。君のセリフを使ったんだ。『生徒の才能を伸ばすのは学校側の責務だと思いません』って」

僕は噴き出した。

「それはおめでとう」

「ありがとう。明日の昼休みから、弾きに行こうと思ってるけど、善かったら来るかい？」

「え。行っても善いの？」

思わぬ申し出に、華やいて、僕は訊いた。

「勿論。この前、云ってただろ？ 聴いてみたいって」

「うん、ありがとう。行くよ」

こうして、ピアノをめぐる、僕とミハエルの昼の一刻は、はじまった。

一曲弾いたところで僕の夢想を打ち切るように、頭上からミハエルの声落ちてくる。

「クラウスも云っていたけれど、その釘、どうしたの？」

「ハインリヒさ」

僕は眸を閉じたまま、答える。

「保健医？」

「そう。跡をつけられた」

ちよつと拗ねたような僕の云い方が可笑しかったのだろう、ミハエルはくつくつと笑った。

なにを？ とは訊かれなかった。

ミハエルはまた三曲ほどピアノを弾く。

先刻とはまったく違う激しさだ。豪雨のように音が降ってくる。

「リヒャルドでもそう云うことさせるんだな」

不意に投げつけられた言葉にどう反応したらいいか判らない。

だけど、ミハエルは僕の反応なんか待ってはいないようだった。

再び豪雨のようなピアノが再開される。

ミハエルはきつと僕を軽蔑している。

ミハエルのピアノは何時だつて、僕を救って呉れるけど、今はただこの躰を打つだけだ。

しばらく、豪雨に耐えていたら、不意にピアノの音がやんだ。

「妬けるな」

ミハエルが云い、僕は吃驚した。

身を起こす。

「え？」

「リヒャルドはそう云うことさせないんだと思っていた」

息がでない。

ミハエルはさらに言葉を続ける。

「リヒャルドは何時もみんなを挑発して誘惑するけど、誰のことも相手にしないですり抜けるだろ？ 何時